

英語における凍結現象 — 認知論的視点から —

高 橋 順 一

要 約

Aitchison (2003:50) によると、凍結句 (freezes) とは、*bread and butter, husband and wife, knife and fork* のように固定された語順をもつ句を言う。本稿では、凍結句としてどのような言語事実があり、それらはなぜ凍結してしまうのか認知言語学の視点から検討し、英語における凍結現象は、恣意的な現象ではなく、いくつかの認知的原理に動機付けられた現象であることを主張する。

キーワード：凍結句，有標／無標性，認知的際立ち

1. はじめに

英語には、語順 (word order) が固定し、順序を変えることができない (irreversible) 句が存在する。Malkiel (1959:113) は、これを「逆にできない2項式」(irreversible binomials) と呼び、Cooper and Ross (1975:63) は、「凍結句」(freezes) と呼んでいる。この用語は言語学形態論、意味論分野では、あまり注目されることも少なく、Crystal (1995) の *A Dictionary of Linguistics and Phonetics* においても該当する項目はない。しかし、現在は、用語として「凍結句」が一般的である。この用語の定義を最新の用語辞典である Aitchison (2003:50) から引用する。

Freezes – Pairs of words which have been apparently ‘frozen’ in a fixed order, such as *bread and butter, husband and wife, knife and fork*. Such sequences show how sensitive humans are to *collocations*, words which are routinely found together.

— A Glossary of Language and Mind —

本稿では、凍結句としてどのような言語事実があり、それらはなぜ凍結してしまうのかを認知言語学の視点から検討し、凍結現象における意味的一般原理を見つけることを目的とする¹。結論として、凍結現象は、英語においては、まったく恣意的 (arbitrary) な現象ではなく、い

くつかの認知的原理に動機付けられた (cognitively motivated) 現象であることを主張する。

2. 凍結句のイディオム化

まず, Cooper and Ross (1975) の事例を見ながら, 凍結句とイディオムの関係を考える。

- (1) bigger and better / * better and bigger
- (2) fore and aft / * aft and fore (船首から船尾まで)
- (3) kit and caboodle / * aboodle and kit [the whole kit and caboodle] (だれもかれも)
- (4) a. Both (cat and mouse / mouse and cat) were exhausted after the chase.
b. Tip never plays (cat and mouse / * mouse and cat) with Teddy.
- (5) a. (Now and then / Then and now), beer satisfies.
b. (Now and then / * Then and now), it rains. [= occasionally]
- (6) a. (Here and there / There and here), inequality exists.
b. (Here and there / * There and here), kids were playing. [= in various places]
- (7) a. (Long and short / Short and long) contributions are welcome.
b. That's the (long and short / * short and long) of it. (*は非文法的であることを表す)

凍結句には, (1)~(3)のように, 接続要素 (A and B における A,B) を相互に入れ替えことができない例から, (4a)~(7a)のように, イディオム句でなければ, 自由に入れ替えが可能な例まで, さまざまな例がある。(4b)では, 動詞句 play cat and mouse が「じらす, もてあそぶ」の意味をもつイディオムになっているので入れ替えができない。(5b) (6b) (7b)は, それぞれ, 「時々」, 「あっちこっち」, 「結局のところ…」ということだ」(the long and the short of it that …) とイディオムとして用いられているので入れ替えができない。ここで, なぜ, 凍結句はイディオム化されると接続要素の入れ替えができないかを検討する。これは, 今日の認知言語学の基本的原理である「全体は部分の単純な総和ではなく, それ以上のものである」という「部分の全体規定性の問題」に関連する。従来, 部分の意味の総和が全体の意味であるという考え, すなわち, 「構成性の原理」(Principle of Compositionality) が支配的であったが, この考えでは, 次のイディオムの例が説明できない。

- (8) a. kick the bucket (くたばる)
b. a cat out of the back (秘密がもれること)
- (9) a. breakfast person (朝食派の人)
b. cat person (ネコが好きなネコ派の人)
c. night person (夜更かしをする人) (河上誓作編著『認知言語学の基礎』3頁)

これらの例は、部分から全体の意味が類推できない典型的な例である。(8a,b)では、個々の単語の意味を加えても()内の意味にはならない。また、(9a,b)では、“person”という表現全体の意味には、部分以上の意味が付加されている。秋元(2002:33)は、イディオムの特徴の一つとして、意味的不透明性、あるいは、非合成性(non-compositionality)を指摘している。以上の観察から、凍結句は、全体がイディオム化され、部分以上の意味をもつことによって、句全体が“凍結”されてしまうと言える。イディオム化は、凍結句の必要条件である。

ただ、イディオム化されても、(10a,b)のように、入れ替えが自由な例もある。

- (10) a. on and off / off and on [= occasionally] (時々)
 b. day and night / night and day [= continuously] (いつも)

Cooper and Ross は、第3の凍結句として、Jespersen (1961)における namby-pamby, handy-dandy, hurly-burly, hocus-pocus 等の複合語の例を挙げているが、これらはリズムという音韻的要因が関係している。以上、まとめると凍結句には、イディオムによる凍結句と非イディオムによる凍結句があることがわかった。次に、凍結句において、どのような構成要素が接続されるかを意味を基準に考えてみる。凍結句を意味領域を基準に分類し、その包括性と分析性において、今日の認知言語学で受け入れられている意味原理を提案したのは、既にふれた Cooper and Ross (1975:66)である。

3. 凍結句の意味領域

Cooper and Ross (1975:66) は、次のように、凍結句を19の意味領域に分類している。

- (11) Here : here and there; this and that; this, that and the other; hither and thither;
 hither, thither, and yon; be neither here nor there [= irrelevant] ; come and go;
 in and out; inhale and exhale
 (12) Now : now and then; sooner or later; tomorrow and the day after;
 yesterday and the day before
 (13) Present Generation : father and grandfather; son and grandson
 (14) Adult : man and boy; men, women, and children; father and son; parent and child;
 mother and daughter; cow and calf; cat and kitten; mare and foal
 (15) Male : man and woman; husband and wife; king and queen; brother and sister;
 boy and girl; Mr. and Mrs.; boy scout and girl scout; boyfriend and girlfriend
 (16) Positive: positive or negative; plus or minus; all or none; now or never; more or less;
 A or Neg-A(e.g. happy or unhappy; like or dislike; participant or non-participant) ;

- many or few; assert or deny; win or lose
- (17) Singular: singular and plural; Mick Jagger and the Rolling Stones;
unidirectional and bidirectional; monotheism and polytheism; monolingual and bilingual;
one or two; first and second; once or twice
- (18) Patriotic: cowboys and Indians; United States and Canada; Italo-Austrian or
Austro-Italian (depending, in part, on which country the speaker identifies with);
Yale-Harvard game (said in New Haven) or Harvard-Yale game (said in Cambridge)
- (19) Animate: people and things; person, place, or thing; men and machines;
animal, vegetable, or mineral
- (20) Friendly: friend or foe; pro- or anti-labor; for or against; support or oppose;
accept or refuse; pro and con
- (21) Solid: land and sea; Army and Navy; field and stream; earth, air, fire, and water
- (22) Front: front and back; front and rear, fore and aft; bow and stern
- (23) Agentive: agent and patient; speaker and hearer; actor and action;
subject and object; hunter and hunted; cat and mouse; employer and employee
- (24) Power Source: bow and arrow; sun and moon; car and driver; horse and carriage;
bourbon and Coke; gin and tonic
- (25) Living: living or dead; the quick and the dead; life and death; live or die;
- (26) At Home: Aeronautics and Astronautics; Earth and Planetary Science;
at home and abroad; home and away
- (27) General: form and substance; general and particular; general and special relativity;
abstract and concrete; word and deed; knowledge and action; medium and message;
- (28) Nominal: nouns and verbs
- (29) Count: count and mass nouns

(11)～(29)は、凍結句が見られる句を意味領域 (semantic domains) (この場合、具体例の最初の語を意味領域として用いている) に区分したものである。この意味領域は、それぞれの凍結句に共有している概念をまとめたものであり、凍結句一般の意味的制約を考える上で参考になる。(11) (12)は、直示表現 (deictic expression) の場所と時間が話し手中心に述べられたもので、凍結句 here and now (今ここに) に見られるように、話し手に近い時間、空間が語順において先行する。(13)の Present Generation (現世代) においては、(11) (12)と同様に、話し手の世代に時間的に近いものが先行する。以下、(14)～(29)は、次のような先行関係で表すことができる。

すなわち、大人>子供、男>女、肯定>否定、単数>複数、有生>無生、愛国的>悲愛国的、味方>敵、固体>液体、前>後、動作主>被動作主、前提存在物>存在物、生>死、自国>海

外, 一般>特殊, 名詞>動詞, 可算>不可算。(A > B における記号>は, 「A は B に先行する」ことを表す²。) Cooper and Ross (1975:67) は, (11)~(29)を説明する一般制約として, 「自己中心の原則」(Me First Principle) を提案している³。

- (30) Me first : First conjuncts refer to those factors which describe the prototypical speaker
(whom we will sometimes refer to as “Me”)
(自己中心：最初の接続要素にはプロトタイプの話者を記述する要素が来る)

この原則は, 話し手にとって, プロトタイプ的なものが接続要素の最初に来るという原則であるが, プロトタイプの定義は特に与えられていない。しかし, この「自己中心の原則」は, (11)から(13)の事例を説明するのに特に説得力をもち, 以下の事例についても, A > B における A がプロトタイプと考えれば容易に説明可能である。Lakoff and Johnson (1980:132-133) は, Cooper and Ross (1975)の「自己中心の原則」について, メタファー論の視点から, 次のように述べている。

「われわれは今いるところにおり, 現在という時に存在しているのであるから, 自分自身を THERE <そこ> よりも HERE <ここ> にいるものとして, THEN <その時> よりも NOW <今> 存在しているものとしてとらえる。こうしたことがクーパーとロスが言うところの「自己中心の方向づけ」(the Me-FIRST orientation) である。すなわち, UP, FRONT, ACTIVE, GOOD, HERE, NOW はすべて規範的人物に向かう方向づけであり, DOWN, BACKWARD, PASSIVE, BAD, THERE, THEN はすべて規範的人物から遠ざかる方向づけである。

われわれの文化に存在するこうした方向づけは, 英語の場合ある語順の方が他の語順よりもより自然であるという事実と関連している。

より自然な語順	それほど自然ではない語順
up and down	down and up
front and back	back and front
active and passive	passive and active
good and bad	bad and good
here and there	there and her
now and then	then and now

一般的な原則を言えば, 原型的な人物のもつ属性と比較して, その意味が「最も近い」言葉が「最初」に来る, ということになる。この原則は形態と内容との間に相関関係があることを示している。(下線引用者)

下線部は、形式と意味の関係からなる日常言語の記号系とその背後に存在する言語主体の認知プロセスとの間に相互関係があること、すなわち、凍結現象が言語における類像性 (iconicity) と関係していることを述べている。類像性とは、記号と対象の間に類似性が認められること、すなわち、記号が意味をある程度まで直接に反映することを言い、「有縁性」とも「動機づけ」とも呼ばれる。Jacobson (1965) は、ラテン語の *Veni vedi veci* (来た、見た、勝った) のように経験事象の時系列と記号の配列とが一致していることを有縁性の例として挙げている。ここで、凍結句も認知的に動機付けられ、類像性を持つことを強調したい。

4. 凍結句と有標性

凍結句における語順の先行関係は、前者が無標の (unmarked)、後者が有標の (marked) 概念を表すと考えれば、その先行関係を説明することができる。この無標の／有標の概念は言語学においては、極めて重要な概念であり、この概念を意味との関連において捉えると、有標項のもつ意味は「ある性質 A が存在する」ということに対して、無標項では、「その一般的意味は性質 A の存在に触れないということ」である。

府川 (1989:141) は、有標性との関連で凍結句における語順の先行関係を次のように提案している。

(31) 凍結句語順の原則：凍結句は自然なこととして期待される順序で並ぶ。

府川 (1989) は、自然界や人間社会では、あるものやことに対して当然のこととして期待されることが無標で、まったくあるいはあまり期待されないことが有標である、と考える。この意味制約によって、上述の凍結句の例を説明することができる。例えば、(16)の肯定＞否定は、我々の外部世界においては、ものが存在することが前提になり、ものがあることが自然なことであり、また、望ましいことであることを示している。従って、「肯定」が無標になり、「否定」が有標になる。(31)の原則によって、次の事例が説明される。

(32) all or none; all or nothing; do's and don'ts; likes and dislikes; many or few;

more or less; positive or negative; pro and con; to be or not to be; true or false

(33) believable or unbelievable; credible or incredible; edible or inedible;

employed or unemployed; happy or unhappy; honest or dishonest; like or dislike;

communist or noncommunist; participant or nonparticipant; resident or nonresident

有標性／無標性の概念は、他動性に関する能動、受動に対して、能動＞受動の先行関係も説明可能である。すなわち、普通のこととして捉える能動の概念が、そうでない受動の概念より

も先に来る。

- (34) adviser and advisee; appointer and appointee; chaser and chased; agent and patient;
cat and mouse; doctor and patient; rulers and subjects;
speaker and hearer; teacher and student

また、「成長した状態」、「生きている」、「友好関係」等もこれらはそうでない状態よりも望ましいことなので先行される。以下の例が該当する。

- (35) cat and kitten; cow and calf; father and son; man and boy; mare and foal;
mother and daughter; parent and child; men, women and children
(36) life and death; live or die; living or dead; men and machines; people and things
(37) accept or refuse; for or against; friend or foe; support or oppose
(38) above and below; better or worse; big and small; credit and debt; freedom or death;
feast and famine; full or empty; good or bad; high and low; hill and dale; light and dark;
little or nothing

男女の地位についても、一般的に、男性が女性よりも優位な社会的地位にあることが凍結句に反映されていると考えられる。しかし、女性が最初に来る場合も若干ある⁴。

- (39) Adam and Eve; boy and girl; boyfriend and girlfriend; brother and sister;
husband and wife; king and queen; man and woman

以上、有標性／無標性の概念が凍結句の語順の先行関係の説明にかなり説得力をもつことを見た。Edmondson (1985:124) は、凍結句の最初の要素は無標であるか、あるいは、プロトタイプであることを指摘している。また、Landsberg (1995:71-72) は、次のような凍結句における語順の意味制約基準を提案している。

- (40) a. Animate precedes inanimate (*man-machine*)
b. Human precedes animate (*man or beast*)
c. Adult precedes adolescent (*father and son*)
d. Male precedes female (*Mr. and Mrs.*)
e. Positive precedes negative (*pro and contra*)
f. Proximal precedes distal (*here and there*)
g. Stronger precedes weaker (*gin and tonic*)

- h. More important precedes less important (*the President and the Secretary of State*)
- i. Prior occurrence precedes secondary occurrence (*veni, vidi, vici*)
- j. Most important of all: egocentricity rules the roost-including preferential dexterity!
(*East and West*)

この意味制約基準は、これまで見てきた Cooper and Ross (1975) や府川 (1989) の事例の多くを説明することができるが、凍結句における接続要素の意味を基準にしている点で基本的原理は同じと言える⁵。

5. 凍結句と認知的際立ち (cognitive salience)

これまで、凍結句の語順を意味論的視点から見てきたが、次に、認知心理学的視点及び認知言語学的視点から見てみる。Cooper and Klouda (1995:331) は、認知的処理原理 (perceptual processing principle) を凍結句の語順を支配する一般の原則として提案している。次に、認知言語学における重要な概念である「参照点構造」と「メトニミー (換喩)」に基づいた凍結句の基本原理を考察する。現在、参照点構造によるメトニミー分析の研究は、人間の認知能力を解明する極めて重要な概念として注目されている⁶。Langacker (1993:6) による「参照点」 (reference point), 「認知的際立ち」 (cognitive salience) と Kovecses and Radden (1998) のメトニミーにおける「認知的際立ちの原則」は、凍結句における語順の一般原則を説明する上で有効な考えであると思われる。まず、凍結現象のさまざまな面において、「参照点構造」という心的操作が反映されていると仮定する。「参照点構造」は、Langacker (1993:6) のよると、図1で説明される。

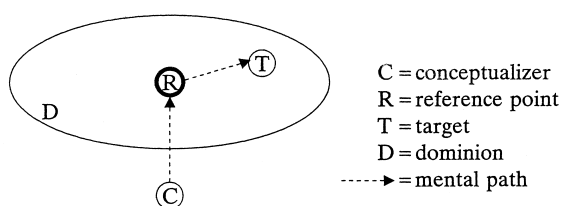


図1 参照点構造

図1において、認知主体 (C) が、あるターゲット (T) に注意を向ける場合、より注意を向けやすい参照点 (R) にまずアクセスし、参照点を経由してターゲットに注意を向ける。この図で、認知主体から延びる点線矢印は、認知主体の注意・意識などがたどる心的経路 (mental path) を表す。また、楕円形で表されている支配域 (D: dominion) は、参照点を経由してアクセス可能な範囲を示す。このような参照点を作り出すのは、人間の基本的認知能力

の一つであるとされる。凍結句は、最初の接続要素が際立つものとして認識されるメトニミーとして表現されている。この場合、最初の接続要素が参照点 (R) となり、最後の接続要素はターゲット (T) になる。また、両方の接続要素は反意語 (opposites) あるいは類義語 (synonym) として、「近接性」の概念をもつメトニミーでもある。

Kovecses and Radden (1998) は、メトニミーにおける認知の際立ちの原則として、以下の原則を挙げている。

(41) 人間の経験に由来する選択性

human over non-human	(人間のほうが選択される)
concrete over abstract	(具体的なものが選択される)
interactional over non-interactional	(相互作用的なものが選択される)

(42) 知覚的な選択性

immediate over non-immediate	(直接的なものが選択される)
occurrent over non-occurrent	(現在起きていることが選択される)
more over less	(量の多いものが選択される)
dominant over less dominant	(優勢なものが選択される)
good gestalt over poor gestalt	(良いゲシュタルトを構成するものが選択される)
bounded over unbounded	(境界のあるものが選択される)
specific over generic	(特定性の高いものが総称的なものより選択される)

(43) 文化的な選択性

stereotypical over nonstereotypical.	(ステレオタイプに合うものが選択される)
ideal over non-ideal	(理想的なものが選択される)
typical over non-typical	(典型的なものが選択される)
central over peripheral	(中心的なものが周辺的なものより選択される)
important over less important	(重要なものが選択される)
common over less common	(一般的なものが選択される)
rare over less rare	(稀なものが選択される)

これらの原則は、メトニミー表現における一般的原則であるが、凍結句においてもあてはまる。Kovecses and Radden (1998) は、われわれの実際の経験においては、これらの原則の複数が関係するのが普通であり、その時にどの原則が他よりも強く働くかは、場合によって異なると述べているが凍結句においても、同様のことが言える。いくつかの原則が競合する時、どの要素が認知的に際立っているかは、その凍結句が発せられるコンテキストによっても異なってくる。以上の観察を踏まえ、以下のような認知的際立ち原則を最後に提案したい。

(44) 凍結句における認知的際立ち原則

- (i) 凍結句においては、認知的に最も際立つ要素が最初に来る。
- (ii) 凍結句は最初の要素を参照点とする参照点構造をもつ、メトニミーの一つである。

認知的際立ちの原則が凍結句全体においてどのように関連し、また、凍結句を反意語のメトニミー表現の一つと見なす時、従来のメトニミーとどのような類似点、相違点があるのかは、今後の英語における凍結現象研究の課題（仮題「メトニミーとしての凍結現象」）としたい。

6. おわりに

英語における凍結句について、Cooper and Ross (1975) のイディオム化の事例を出発点に、凍結句の意味領域を検討した。この意味領域全体の中には「自己中心の原則」、「プロトタイプ」、「無標性／有標性」の概念により、凍結句の説明が可能であることを見た。また、凍結句の語順の先行関係を説明する一般的意味制約として、府川 (1989), Cooper and Klouda (1995), Kovecses and Radden (1998) を検討し、この中で、認知言語学の参照点構造の基づく「認知的際立ちの原則」がこれまでの凍結句に対する説明原理として優れていることを論じた。また、この原理は、人間の基本的認知能力の一つであり、英語における凍結現象がまったく、恣意的な現象ではなく、認知的原理に動機付けられた現象であることを明らかにした。

注 1. 凍結句の説明原理として、意味的原理、音韻的原理、認知的原理が考えられるが、本稿では、音韻的原理の説明をあえて除外した。音韻的原理については、稿を改めて検討したい。凍結句の全体像を捉えるには、音韻的原理の考察は欠かせない。Cooper and Ross (1975:80) は、凍結句の音韻的決定要素を詳細に論じている。

2. Cooper and Ross (1975) は、食物と飲み物に関する凍結句における意味制約階層として、次の例を挙げている。

The Food and Drink Hierarchy (approximate) Fish>Meat>Drink>Fruit>Vegetables>Baked Goods>Dairy Products>Spices

Examples: fish and game; meat and drink; meat and potatoes; food and drink ; surf and turf; ham and eggs; corned beef and cabbage; ham and cheese; bacon and eggs; fish and chips; Steak and Brew; Steak and Stein; meat and gravy; fruit and nuts; fruits and vegetables; coffee and donuts; milk and cookies; tea and scones; beer and pretzels; bread and butter; bread and cheese; peaches and cream; milk and honey; apple and spice; sugar and spice; oil and vinegar; wine and cheese; neither fish nor fowl

Rossはこれらの階層順序の言語研究を“the nuts and bolts linguistics”と呼んだ。

3. Lyons (1977:638) は、“egocentric”という語を用いている。

The canonical situation-of-utterance is egocentric in the sense that the speaker, by virtue of being the speaker, casts himself in the role of ego and relates everything to his viewpoint.

4. 例としては、ladies and gentlemen, bride and groom, mother and father, mom and dad, ma and paなどが挙げられる。これらは、一般社会における男性・女性の優位関係を語順の入れ替えによって、丁寧さや尊重を表したものであるとされる。（「淑女」、「新婦」－ ladyは本来 lord（貴族）の婦人であり、gentlemanより身分が上であるため前に出すという説もある。（奥津文夫編「英単語発想事典」三修社、132頁））また、子供の視点から、「父親」、「母親」の必要性が語順に反映されていると考えられる。

5. 凍結句研究の先駆者 Abraham (1950:276-287) は、スペイン語、英語における凍結句を比較し、既に、次のような語順における意味的傾向を指摘していた。

We have noted the following tendencies: the desirable usually precedes the undesirable, the more important the less important, the light the dark, the masculine the feminine, the positive the negative, the principal the subsidiary, the greater the smaller, the near the far, the top the bottom, the present the future.

6. Vosshagen (1999:289-308), 山梨 (2004:61-66) 参照。
7. Jespersen (1976:99) は、話し手は「最も強く意識されているものを、まず発する傾向がある」と述べている。

参考文献

- Abraham, R.D. 1950. Fixed order of coordinates. A study in lexicography. *Modern Language Journal* 34(4). 276-287.
- Aitchison, Jean. 2003. *A Glossary of Language and Mind*. Edinburgh University Press.
- 秋元実治. 2002. 「文法化とイデオム化」 ひつじ書房.
- Cooper, W.E. and Klouda, G.V. 1995. "The psychological basis of syntactic iconicity" In M.E. Landsberg (eds.) *Syntactic Iconicity and Linguistic Freezes*. Mouton de Gruyter.
- Cooper, W.E. and Ross, J.R. 1975. "World Order." *Papers from the Parasession on Functionalism*. 63-111. Chicago Linguistic Society.
- Crystal, David. 1995. *A Dictionary of Linguistics & Phonetics*. Fifth Edition. Blackwell Publishing.
- Edmondson, J.A. 1985. "Biological foundations of language universals." In C. J. N. Bailey and R. Harris (eds.) *Developmental mechanisms of language*. 109-130. Oxford: Pergamon.
- 府川謹也. 1989. 「行ったり来たり」と「*来たり行ったり」『獨協大学外国語教育研究』8, 31-69.
- Jacobson, R. 1965. Quest for the essence of language. *Diogenes*. 51:21-37.
- Jespersen, O. 1961. *Growth and Structure of the English Language*. Blackwell.
- . 1976. *Essentials of English Grammar*. London: Allen & Unwin.
- 河上誓作 (編) 1996. 『認知言語学の基礎』研究社.
- Kovecses, Z. and G. Radden. 1998. "Metonymy: Developing a Cognitive Linguistic View," *Cognitive Linguistics* 9: 1, 37-77.
- Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press. [渡部昇一・楠瀬惇三・下谷和幸訳. 1986. 『レトリックと人生』大修館書店.]
- Langacker, R.W. 1993. "Reference-point constructions." *Cognitive Linguistics* 4:1-38.
- Landsberg, M.E. 1995. "Semantic constraints on phonologically independent freezes" In M.E. Landsberg (eds.) *Syntactic Iconicity and Linguistic Freezes*. Mouton de Gruyter.
- Lyons, J. 1977. *Semantics II*. Cambridge University Press.
- Malkiel, Y. 1959. "Studies in Irreversible Binomials." *Lingua* 8, 113-160.
- Vosshagen, C. 1999. "Opposition as a Metonymic Principle" In Klaus-Uwe Panther and Gunter Radden (eds.) *Metonymy in Language and Thought*. John Benjamins Publishing Company.
- 山梨正明. 2004. 『ことばの認知空間』開拓社.

Freezing Phenomena in English
— From a cognitive view —

TAKAHASHI Junichi

According to Aitchison (2003:50), freezes are pairs of words which have been apparently ‘frozen’ in a fixed order, such as *bread and butter*, *husband and wife*, *knife and fork*. Such sequences show how cognitively motivated they are in English.

The purpose of this paper is that in English syntax word order is not arbitrary but fixed or ‘frozen’; that is, governed by predictable and generalizable rules.

Such irreversibly ordered items, whether in idiomatic or in nonidiomatic constructions, have been enumerated and categorized, and the underlying principles ruling their sequence investigated.

(たかはし じゅんいち 本学非常勤講師)